

# 博士学位論文審査要旨

2020年1月30日

論文題目：現代アメリカにおけるソーシャルメディアから広がる  
フェミニスト・ムーブメント

学位申請者：井口 裕紀子

審査委員：

主査：グローバル・スタディーズ研究科 教授 池田 啓子

副査：グローバル・スタディーズ研究科 教授 アンヌ ゴノン

副査：法学研究科 教授 飯田 健

要 旨：

本論文は、ポスト・フェミニズム言説が台頭する1980年以後のアメリカでオンライン上に広がるフェミニスト・ムーブメントに注目し、現代のフェミニズムにおいて、ソーシャルメディアはどのような役割を持ち、フェミニズムはソーシャルメディアとの関わりの中でどのように変化しているのかを考察するものである。筆者は、オンライン上に展開されている約300のフェミニズム運動を仔細に観察し、具体例を示しながら、キャシー・コーエン(Cathy J. Cohen)とジョセフ・カーネ(Joseph Kahne)が提唱した「参加型政治」の理論と、近年のフェミニズムにおいて重要とされている「インターセクショナリティ」の概念を使って議論を進めている。

論文は終章を含め全六章から成り、まず、第一章で研究の目的、方法論などを述べた後、第二章では、先行研究を総括するとともに、オンライン・フェミニズムは、ポスト・フェミニズム言説が流通するアメリカで、言説と自らの経験にずれを感じた女性たちが、ジェンダーによって引き起こされる問題や葛藤を克服しようとする中で生まれたものであることを指摘し、第三波フェミニズムからソーシャルメディアの頻用を特徴とする第四波フェミニズムまでの発達の経緯をたどっている。第三章では、研究対象としたグループが具体的にどのようにソーシャルメディアを用い、どのような活動を行っているのか、「情報提供型」と「マイクロ・ポリティックス型」の二つに分類し、オンライン・フェミニズムの広がりと多様性を明らかにしている。さらに、現代のフェミニズムにとって、写真やアート作品による「視覚化」が重要であり、これによって、これまでは沈黙や忘却といった方法で各々の日常の中で処理されてきた問題が共有され、共感の輪を広げる時、それぞれの経験が集団的記憶やジェンダー差別の確固とした証拠へと作り変えられて行くと論じている。

第四章は、第四波フェミニズムを特徴付けるハッシュタグ・フェミニズムに焦点を当て、具体的事例をもとに、ソーシャルメディアとインターセクショナリティの関係性の中で、現代のフェミニズムがどのように変化しているかを考察した。ハッシュタグは、個々人が運動体に属さなくても、それぞれの日常から居ながらにして叫びをあげ、自分自身の存在の中にあるアイデンティティの交差性から、男性をも含む多様な他者と繋がることを可能にした。それによって、多様な属性を持った人々が特定の問題のもとに集まり、従来の枠組みを超えた連携が生み出されているという。

第五章では、一人の女性の一つの投稿がハッシュタグを通じて広まることで21世紀最大規模のフェミニズム運動となったウィメンズマーチに焦点を当て、異なるバックグラウンドや問題意識を持つ人々やグループが、どのようにして協働し、運動を組織したのかについて考察している。ここでは運動による文化創造の側面を強調し、ソーシャルメディアというオンラインでの交流がベツィ・グリール(Betsy Greer)

のいうクラフティヴィズムに補強され、主体的で能動的な運動との関わりを作り出し、短期間に大規模なデモを行うための原動力となったことを論じている。

最終章では、議論をまとめるとともに、コクーン化、多様化の中に潜む対立、移ろいやすきなど、オンライン・フェミニズムが抱える問題を指摘し、今後の研究の課題を指摘している。

口頭試問では、論文の概要について約50分にわたる発表があり、それをうけて、約40分の質疑応答を行った。審査委員からは、ソーシャルメディアがフェミニズムの思想自体をどのように変えているか、またオンライン上の運動がどの程度社会制度の変革に力を発揮しているのか、などについてもう一步突っ込んだ議論があればより魅力的な論文に仕上がったのではないかという意見が出された。近年のフェミニズム研究は、ソーシャルメディアの役割について期待をもって語っているが、具体的かつ総合的な視点から扱ったものは日米の学会において今までのところまだ出ていない。豊富なデータを収集し、流動的なオンラインの世界に展開されるフェミニズムを総合的に考察したこの研究の意義は大きい。

よって、本論文は、博士（アメリカ研究）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

## 総合試験結果の要旨

2020年1月30日

論文題目： 現代アメリカにおけるソーシャルメディアから広がる  
フェミニスト・ムーブメント

学位申請者： 井口 裕紀子

審査委員：

主査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 池田 啓子

副査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 アンヌ ゴノン

副査： 法学研究科 教授 飯田 健

要 旨：

学位申請者井口裕紀子氏に対する総合試験を、2020年1月28日（火）、13時10分から14時40分まで、同志社大学志高館地下2番教室で実施した。試験の前半50分をプレゼンテーション、後半の40分を質疑応答に当てた。

申請者は、論文の研究課題と方法論、具体的な考察内容をパワーポイントで写真などを見せながら報告した。また、審査委員からの質問に的確に答え、今後の研究の方向性についても説明した。本論文の一部は、査読付きジャーナルで発表されており、申請者がこの分野の専門知識を十分に持っていることは質疑応答の内容からも明らかであった。また、本論文は、一次資料および二次資料のほとんど全てが英語であり、これらの資料を使いこなして論文を仕上げたことから十分な語学能力を持つと判断された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

## 博士學位論文要旨

論文題目： 現代アメリカにおけるソーシャルメディアから広がる  
フェミニスト・ムーブメント

氏名： 井口 裕紀子

### 要旨：

本論文は、ポスト・フェミニズム言説が台頭する1980年以後のアメリカで、オンライン上に広がるフェミニスト・ムーブメントに注目し、現代のフェミニズムにおいて、ソーシャルメディアはどのような役割を持ち、フェミニズムはソーシャルメディアとの関わりのなかでどのように変化しているのかを考察するものである。

現代のアメリカでは、女性の大学卒業率や就職率が向上し、政治や社会において重要なポストを得る機会も増えたことから、女性たちを取り巻く環境は、以前に比べて変化している。しかしながら、今でも男女の間には、収入格差やセクシュアル・ハラスメントなど、多くの性差別が存在し、フェミニズムは過去のものとするポスト・フェミニズム言説と、自らの経験にずれを感じる女性たちは多い。このようなアンチ・フェミニズムの風潮が強いアメリカ社会において、あえてフェミニストを名乗り、今こそフェミニズムが必要だと主張する個人たちがグループを作り、インターネットを使ったフェミニズム「オンライン・フェミニズム」を展開している。

初期のオンライン・フェミニズムでは、ホームページ、ブログ、オンライン掲示板といったものが活動の場の中心であった。2000年以降には、次々と誕生したフェイスブック (Facebook) やツイッター (Twitter)、インスタグラム (Instagram) といった SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) などが使われるようになり、それらのソーシャルメディアを通じて展開するフェミニスト活動が多様化し、今までも増して活発化している。この動きを受けて、ソーシャルメディアによって展開されるフェミニズムは、第三波フェミニズムに続く新しい波、「第四波フェミニズム」として位置付けられるようになっている。

第四波フェミニズムについて、ジャーナリストのアントニア・ゼルビスシアス (Antonia Zerbisias) は、ここ数年で最も有力なプラットフォームはソーシャルメディアであり、「デジタルな第四波フェミニズム」が到来したと語り<sup>1</sup>、フェミニズム研究者であるヘスター・ベール (Hester Baer) は、「デジタルプラットフォームは、フェミニストのアイデアを広く普及させ、ジェンダーや性差別についての新たな会話の方法を形作り、様々な人々と繋がりの中で、クリエイティブな抗議運動を作り出す大きな可能性を持っている<sup>2</sup>。」と述べている。

第四波フェミニズムの論者たちは、ソーシャルメディアという新たなメディアが持つコミュニティ構築や情報共有、拡散といった機能がフェミニズムの発展に果たす役割を強調し、第四波フェミニズムの新しさを「ソーシャルメディアを使ったフェミニズム」と定義する<sup>3</sup>。しかし、近年

<sup>1</sup> Antonia Zerbisias, "Feminism's fourth wave is the shitlist," *Now*, September 16, 2015, Accessed March 2, 2019, <http://Cart8.shopserv.jp>.

<sup>2</sup> Hester Baer, "Redoing feminism: digital activism, body politics, and neoliberalism," *Feminist Media Studies*, 2016, Vol.16: 18.

<sup>3</sup> Jennifer Baumgardner, *F'em!/: Goo Goo, GAGA, and Some Thoughts On Balls*, New York: Seal Press,

のフェミニズム研究においては、ソーシャルメディアが持つ発信力、拡散力、動員力が自己表現やコミュニケーションを促進させることを指摘する論者もいるが、フェミニズムがどのように変化しているかという点について、総合的な立場から考察したものはこれまで出されていない。本研究では、より一歩突っ込んで、ソーシャルメディアが運動のコミュニケーション形態を変化させていることが、今日のフェミニズムにとってどのような意味を持つのか、フェミニズムの内容はどのように変化したのかといった問題について考えたい。

オンライン・テクノロジーは、日に日に進化を続け、流動的、横断的で、予測不可能だがオープンな空間を生み出している。この変化の激しい空間で展開されるフェミニズムを、オンラインで実際に活動を行っている具体的な運動を観察することによって、その始まりから発展の道り、運動の特徴や活動のプロセスなどを総合的に理解することは、現在のアメリカのフェミニズムのあり方や方向性を理解するために重要である。

本稿では、ソーシャルメディアを使ったフェミニズムの活動、広がり、繋がり、行動を把握するために、オンライン活動を行なう様々なフェミニスト・グループのうち約300グループをインターネット上で観察し、その目的、活動、主張や参加者の属性などを仔細に記録、リストや図の形に視覚化し、内容については言語化した。そのようなデータをもとに、現代のフェミニズムにおいてソーシャルメディアはどのような役割を持つのか、そしてフェミニズムのそのものはどのように変化しているのかを、「インターセクショナルリティ (Intersectionality)」と「参加型政治 (Participatory Politics)」の2つの視点から考察した。

「インターセクショナルリティ」とは、ジェンダー研究者であるキンバリー・クレンショー (Kimberly Crenshaw) によって提唱されたものであり、抑圧や差別、暴力といった問題は、ひとつの要因によって形成されるものではなく、ジェンダー、人種、民族、階級といった多様な要因が複合的に交差する中で起きるとする概念である<sup>4</sup>。従来、個人の抱える問題は人種、ジェンダー、階級などの特定のアイデンティティ・グループのものとして捉えられてきた。この概念は、個人が遭遇する差別を多様なアイデンティティが交差したところに生まれるものとし、個々人の独自の経験を重要とする。インターセクショナルリティは、現代のフェミニズムにおける重要なキーワードとなっており、研究者だけではなく、運動に携わる人々にも行動目標として認識されている。特にソーシャルメディアの機能であるハッシュタグを使って展開されるハッシュタグ・フェミニズムは、多様な差異の交差点としての個人を重視し、それぞれ異なった個人が広く繋がることを可能にしている。

「参加型政治」は、政治学者でフェミニスト・アクティヴィストのキャシー・コーエン (Cathy J. Cohen) と教育政治研究者のジョセフ・カーネ (Joseph Kahne) が提唱した概念である。彼らは参加型政治について、個人とグループが相互に作用し合い、社会的関心となっている問題に発言

---

2011; Kira Cochrane, *All the Rebel Women: The Rise of the Fourth Wave of Feminism*, London: Guardian Books, 2013.

<sup>4</sup> Kimberly Crenshaw, "Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Anti-Discrimination Doctrine, Feminist Theory and Anti-Racist Politics," *The University of Chicago Legal Forum*, 140: Vol.1989, Article 8, 1989.

し、社会に影響を及ぼすピア・ベース<sup>5</sup>な政治的行為を意味すると述べている<sup>6</sup>。この参加型政治は、参加者たちによる5つの活動—調査、対話とフィードバック、循環、生産、動員—が働くことで成り立つものである。これら5つの活動は、常に対等の力で動いているかどうかということとは重要ではなく、各運動がそれぞれの目的によって重きを置く活動は異なるが、なんらかの形でこの5つが相互に働き合うことが、参加型政治を構成するためには重要である。この参加型政治という運動形成を理解するための理論とインターセクショナルリティという思想的コンセプトという二つの視点から、考察を進めることは、現在のフェミニズムのありかたを総体的に理解するために必要だと考えている。

ソーシャルメディアは、日常を生きる個人一人一人が能動的主体(アクティブ・エージェント)としてそれぞれの立場で発信することを可能にしている。私が観察した300のフェミニスト・グループでは、セクシャル・ハラスメントやストリート・ハラスメント、ミソジニーな発言や暴力、ドメスティック・バイオレンス、女性表象など、職場進出や政治進出のような数字で表されるような不平等ではなく、女性が日常のなかで体験する多岐にわたる問題について、それぞれのグループが特定の問題を標的に定め運動を行っていた。これらのフェミニスト・グループは、複数のソーシャルメディアを駆使することにより、女性たちが自由に発言し、互いにエンパワーし合う参加型政治の空間を生み出している。そして、その空間は日に日に拡大している。特に、フェミニストたちが挑戦するテーマは、これまでは沈黙や忘却といった方法で、各々の日常の中で処理されてきた問題であり、そのような日々の葛藤に声をあげ、共有し、共感の輪を広げていくことで、フェミニストたちは、それぞれの経験を集団的記憶や女性蔑視や差別の確固とした証拠へと作り変えている。

また、ソーシャルメディアとインターセクショナルリティの結びつきは、カテゴリー化された女性という存在のなかにある多様性や複雑性を明らかにしている。女性の間にある格差や差異に光を当てることは、フェミニズムにおけるマイノリティの周縁化を防ぎ、従来の「女性」というカテゴリーや特定のアイデンティティを超えた人々の連携を作り出している。本論文で取り上げるハッシュタグ・フェミニズムや「ウイメンズマーチ」の事例は、このような新しいフェミニズムを代表するものである。ハッシュタグ・フェミニズムは、1つの投稿に複数のハッシュタグをつけることで、自身の存在の中にあるアイデンティティの交差性を言語化し、それぞれのハッシュタグに惹きつけられる他者とコミュニケーションを図ることを可能にしている。それぞれのハッシュタグのもとに集まったオーディエンスたちの集合体は、重なる部分も重ならない部分もあり、複雑に絡みあっている。ここから生まれるフェミニズムは、決してフェミニストやフェミニズムをモノリシックに捉えるものではなく、埋もれがちなマイノリティたちのカウンター・ディスコースを可視化し、主流と対抗する勢力を作る活動も生まれている。さらに、広範囲な情報の拡散や共有が瞬時になされるようになったことによって、一つの投稿が、多様な人々を動員する「ウイメンズマーチ」のような大きな運動を作り出すこともできるようになった。今日のフェミニズ

<sup>5</sup> コーエンとカーネによると、ピア・ベースとは形式にとらわれた制度や身分の違いによって導かれるものではなく、同じような社会的関心を基に集結することを意味する。

<sup>6</sup> Cathy J. Cohen and Joseph Kahne, "Participatory Politics: New Media and Youth Political Action," *Youth & Participatory Politics* (2014): vi, 3-4, Accessed August 2, 2017, [https://ypp.dmlcentral.net/sites/default/files/publications/Participatory\\_Politics\\_Report.pdf#search=%27participatory+politics+new+media+and+youth+political+action%27](https://ypp.dmlcentral.net/sites/default/files/publications/Participatory_Politics_Report.pdf#search=%27participatory+politics+new+media+and+youth+political+action%27).

ムは、複雑なアイデンティティが交差する場としての個人性と、そのような個人性を持った人々の多様性の両面を重視し、絶えず新しい運動を作り出す流動的な「文化」を創出していると考え